

〔講演〕

## 長崎と近代中国

北九州市立大学教授、元長崎シーボルト大学学部長 横山 宏章

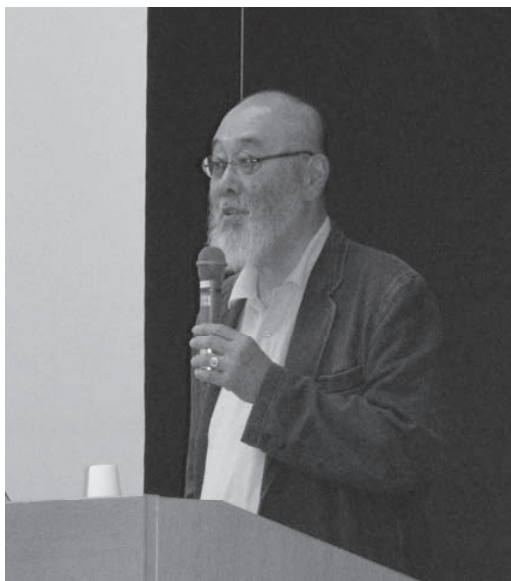
**小林** それでは、これから講演をいただきます講師のご紹介をさせていただきます。横山宏章先生です。横山宏章先生のご専門は中華民国政治史、近代長崎県史です。1944年、山口県生まれ。一橋大学法学部卒業、朝日新聞社記者を経て、一橋大学大学院法学研究科に進まれ、法学博士を取得されました。その後、1978年明治学院大学法学部専任講師、教授を経て、1999年、長崎シーボルト大学国際情報学部教授、2005年、北九州市立大学大学院社会システム研究科教授に就任、現在に至っております。主な著書は「孫文と袁世凱」、「草莽のヒーロー」、こちらは長崎新聞社から出版されております。「陳独秀の時代」など多数ございます。それでは、横山先生宜しく願い致します。

**横山** ご紹介がありましたように、私は1999年から2005年まで、県立長崎シーボルト大学の設立の時から6年間、長崎におりました。長崎関係の出版物は、『長崎が出会った近代中国』以外にも、『孫文と長崎』とか、『長崎唐人屋敷の謎』、渡邊元という人の伝記（『草莽のヒーロー』）、三菱造船所で作られました中山艦の記録（『中国砲艦「中山艦」の生涯』）など出ております。もともと山口県生まれで、東京の生活が長く、長崎とは縁がなかったものですが、長崎に6年間いて、長崎が大変気に入りました。この縁で、長崎のことは素人ながら色々書かせていただいております。現在、『新長崎市史』全4巻の内の3巻、近代編の編集に携わっており、来年の3月までには出版する予定でございます。その中にも東亜同文書院が長崎に一時的な疎開をした歴史

が書かれております。丁度その原稿を読んだばかりで、この講演会のお話がありまして、親しみを感じました。

今日のお話は、清末から中華民国時期の長崎と中国の関係でございます。政治史、政治学の研究者ですから、政治的なお話が中心となります。その後、少し経済的な結びつきとか、文化的な結びつきについて少し触れてみたいと思います。経済的といっても、長崎造船所でつくられた中国の砲艦である中山艦が、中国でどのような扱いを受けてきたかということや、華僑活動に触れるにとどまります。

最初に孫文と長崎をお話します。私は共産党を創設した陳独秀、国民党を指導した孫文、この2人の研究をしておりました。新大学の設立にもなって長崎にやってきました、長崎の華僑史に興味を持たれている方に、「孫文は何回長



崎にみえられたのですか」と聞いたところ、「それはよう分からん」という話でありました。「それならば私がちゃんと調べましょう」と、勝手に決めてしまいました。それで当時の外務省の記録とか、あるいは外務省の記録の無い時代の回想とか、そういうのを調べまして、孫文は長崎に合計9回ほど立ち寄ったことが判明しました。

立ち寄ったという表現をしましたが、必ずしもすべてが長崎に滞在したわけではなかったからです。というのは、もちろん皆さんもご承知のように当時、中国大陸と日本を往復するには、ほとんどの方は長崎に来て船に乗って上海に行くとか、上海から船に乗って長崎に来ます。あるいは横浜や神戸から船に乗って、中国に渡る場合も、長崎に停泊します。数時間、あるいは半日ぐらい船が停まっていますから。その間は上陸して、長崎で昼飯を食って、丸山の辺でちょっと女性を、というようなことがいっぱいありました。それでも寄ったことに致しましたら、孫文が長崎に来たのは9回になります。

最初はいつかというところ、これは外務省の記録にはありません。孫文と非常に仲の良かった宮崎滔天という人の回想録によりますと、1897年の11月に、孫文は宮崎滔天と一緒に長崎に来ています。孫文が日本に亡命した直後に近い時期です。宮崎滔天のふるさとである熊本の荒尾に孫文を連れて行きまして、その時に長崎に寄って、そこで長崎の渡邊元の自宅を訪れております。宮崎滔天という人物は皆さんも知っていらっしゃると思いますけども、もともと名前は宮崎寅蔵でしたが、滔天と名前が付いたのは、この時です。渡邊元が二人を一緒にお寺に連れて行くと、お経の一説に滔天という文字がありました。渡邊元が「これはなかなか良いから、お前の号にしろ」と言って、「あ、そうだね」と感心し、宮崎滔天はそれからこの号にしたということです。ですから、宮崎滔天の滔天という号は長崎生まれでございますから、是非その点は覚えてほしいと思います。

9回も来ていますが、その内、大歓迎されたのは中華民国成立後の1913年の3月のことです。中華民国が誕生するのが1912年1月1日で

ありますが、その時に孫文は中華民国の臨時大総統となりました。大総統職を辞した後、あらためて日本を訪問しましたが、その時には非常に歓迎されております。この時はまさしく国賓待遇で扱いをされております。長崎では、長崎県知事、長崎市長、裁判所の偉い人とか、多くの著名人が歓迎しております。それから勿論、長崎にいる華僑、長崎に留学している当時の中国人の留学生なども、大歓迎しております。3日間しか滞在していませんが、朝、昼、晩と、宴会、宴会、集会、集会に明け暮れていたわけです。

何故こんなこと言うかというところ、それまでの孫文への接し方と大違いであったからです。以前の孫文は、基本的には清朝打倒のテロリストで、要は清国政府から言えばお尋ね者でした。首に賞金が掛かっているわけですから、長崎の華僑は亡命中の孫文を歓迎する訳にはいかなかったのです。長崎にありました清国領事館からみれば、危険人物極まりないわけでありまして、そうおっぴらに孫文を迎えることは出来なかったわけでありまして。ところが大総統になった後の1913年の長崎訪問は、これは本当に国も挙げての国賓待遇です。日本政府も特別列車を仕立てて、孫文を迎えています。特別列車は、今ではなかなか考えられませんが、中国では今でもよくあります。

中国に行くと、何か突然列車のスケジュールが狂ってるな、と思うと、特別列車が通過します。「今、鄧小平が乗った特別列車が通るので、通過するまでは待ってくれ」というようなことは、よくありました。当時の孫文は、そういう国賓待遇で来られております。

その時に訪問したのが鈴木天眼の家です。この時に撮った集合写真は、皆さんも見たことのあるんじゃないかと思えます。鈴木天眼という方は当時、『東洋日の出新聞』という新聞を発行しておりました。当時、この新聞社は孫文ら革命派の運動を非常にサポートしてきていて、いろんな支援をしていました。そのために、感謝の意を含めて孫文が自ら鈴木天眼のお家に伺ったわけです。その時、鈴木天眼が身体をこわしていたというのがありますが、孫文の気配りがう

かがえます。

ここに、孫文と長崎、あるいは九州絡みの支援者たちと一緒に撮った写真があります。左側の3人目の背の高いのが宮崎滔天であります。それから、孫文の右側が鈴木天眼で、その隣が西郷四郎です。姿三四郎のモデルになった柔道家であります。当時は『東洋日の出新聞』の記者でありました。その隣は戴天仇です。戴季陶という言い方も致しますが、日本人よりも日本語が上手だと有名でした。孫文は日本に10年以上おりましたが、どうやら日本語が喋れなかったようです。ほとんど、この戴季陶が通訳しております。

別の集合写真にはあるように、今の丸山地区の上の方にありました鳳鳴館での歓迎式典では、ほとんど県や市の大物が全部参列しております。この参加者の一人一人の名前を調べるのに、地元の華僑の方は非常に苦労されましたけど、かなりの数が確定されております。

それから、恩分が最後に長崎に立ち寄ったのが1924年の11月です。翌年の3月に亡くなりますけれども、最後の立ち寄り、長崎の船上で記者会見しただけで下船していませんが、そこで彼は小さな演説をしております。その時の新聞がありますが、「中華民國を左右するのは国民の力のみ」というような演説を致しました。その後、神戸に立ち寄りまして、そこで話した「大亜細亜主義」の講演が有名でありますけども、長崎では、その演説とほぼ同じ内容の原型を語っています。

長崎の孫文支援者には、他にどういう人がいるかという、最近梅屋庄吉が非常に有名であります。実は昨日、梅屋庄吉に絡む会議に参加してきました。香港上海銀行の旧長崎支店があります。それを改装しまして、長崎近代史の資料館に衣替えすることとなります。勿論、長崎には立派な歴史文化博物館がありますけども、ここはほぼ近世、江戸時代の華やかな時の長崎の歴史が中心に展示されております。しかし明治以降の長崎近代史の展示場が無いということで、新たな展示場を開設することになりました。その中心が梅屋庄吉の関係史料です。香港上

海銀行の旧館は国の重要文化財として指定されておりますが、それを資料館にすることが、県と市の協同作業で進められております。梅屋は長崎に生まれて、そして映画事業で成功しまして、お金を持ちになりました。私財を投げ出して孫文を支援したという事で有名であります。

渡邊元は先ほど言いましたが、宮崎滔天との仲間で、これは炭鉱主であります。今、話題になっていきます軍艦島(端島)の炭鉱を、最初に開いたのは深堀の鍋島藩家臣達でありまして、その責任者の息子がこの渡邊元であります。明治以降、彼も松島の炭鉱主になっていくわけでありまして、そして孫文と会って支援の約束を致しました。残念ながら炭坑事業は途中で失敗しまして、孫文への支援が出来なかったことを残念がっていたというのが、宮崎滔天の回想録の中にあります。

もう一人は、金子克己です。佐世保の人であります。この人はいわゆる大陸浪人であって、まっとうな職業がない人でありましたが、しょっちゅう大陸に行って、孫文の活動に、一戦闘員として協力しております。しかし当時の日本政府と深い関係がありますから、いろんな情報を日本政府にもたらして、軍部や政府からお金を貰うというちょっと胡散臭いところもあるのですが、孫文のために非常に活躍された方です。こういうのが、長崎の孫文支援者としては、有名な方です。

さて、中国からどういう人が来たかという、有名な黄興が長崎に来ています。彼は孫文の片腕だった人で、「中国の西郷隆盛」と言われた怪物です。酒は強いし、豪傑で、軍人さんでもあったわけですが、この人は辛亥革命が起こる前の1909年の1月に、宮崎滔天と3日間長崎で滞在しております。外務省の記録にもありますから間違いありません。この時の黄興をお世話したのが、長崎芸者の愛八だという回想もあります。これまで私は「あいはち」と思っていました。この前調べたら「あげはち」と書いてありました。そうなんですかと、皆さんにお教え願いたいです。愛八については、ご承知のように、なかにし礼の『長崎ぶらぶら節』が映画にもなりましたが、

この丸山の芸妓の愛八と古賀十二郎が主人公のお話であります。黄興と愛八の話は、実は1941年の『長崎日日新聞』で回想として記載されています。戦争中の新聞ですから、確かではありません。それによると鈴木天眼が宝亭で密かにかくまった黄興の世話をしたのがこの愛八でありました。黄興は書が上手いですから、書をしたためて、彼女に何枚かの書を渡したそうです。ところが愛八は黄興が大物とは知らずに、その貰った書を皆さんにあげて、自分は持ってなかった。その後、辛亥革命が成功するとんでもない著名人であったというようなことが分かって、「しまった。あの時に渡すのじゃなかった」と言ったという話が回想録の中にあります。そういう話は、好きなものですから、ほんじゃあ確証を探そうと思って、一生懸命に他の資料も探したのですが出てきません。確かに黄興が宝亭で酒を呑んだという記録は間違いのないのですが、酒を呑んだだけのことが何でもこうやって話が膨らむのだろうかと思うと、なかなか面白いですね。

それから、先ほど言いました西郷四郎に話は移ります。彼は辛亥革命が起こりますと、すぐ武漢に飛びまして、「武漢観戦通信」という記事で、この『東洋日の出新聞』に16回に渡って連載を致します。皆さん、辛亥革命は武漢で蜂起は成功したと言われてきましたが、実はこれ微妙なところですよ。武漢というのは3鎮ありまして、武昌、漢口、漢陽など三つの町で形成され、蜂起に成功したのは武昌で、その三つの町全部を革命派が支配することは出来ませんでした。途中、武漢戦役の軍事を指揮した黄興は、作戦を変えて上海に戻って、そして上海や南京で革命を成功させます。武漢で戦われた凄い戦闘の記録を、西郷四郎が報道しております。『東洋日の出新聞』に、当時の戦闘記録が残っております。貴重な戦場報告となっています。

辛亥革命と長崎の関係も興味あります。先ほど言いましたように長崎の人から見れば、清朝末期の時の孫文はお尋ね者でございますもので、あまり支援をすることができなかった。ところが辛亥革命が起こって南京が革命派の手に落ちます。そして中華民国が誕生しました。ここで初

めて、華僑の人たちは「万歳、万歳」ということになりまして、清朝の支配を受けていた長崎の清国領事館も、中華民国領事館に変わってきますと、大っぴらに「万歳」ということが言えるようになるわけでもあります。そしてお祝いの提灯行列をしたり、あるいは華僑は革命派に義援金を送ったり、長崎には医専がありましたから、そこに留学していた学生が赤十字軍を組織して上海に行くとか、あるいは普通の学生は決死隊を組織して上海に戦いに行くとか、いろいろなかたちで支援が行われておりました。ここにある写真のように、孫文から長崎の『東洋日の出新聞』に感謝の書が送られております。そうした支援運動を『東洋日の出新聞』が報道し、支援した、ということに対する感謝状であります。ただ、この文字はどう見ても、孫文が書いた書体ではなさそうです。別の人が文字を書いて、最後に孫文がサインをしたような感じだと言われております。

それ以外どのような人がいるかという点、柏文蔚が挙げられます。大総統を辞した後、孫文は、ご承知のように袁世凱に政権を渡します。そして袁世凱打倒の第2革命に立ち上がりますが、失敗致します。革命派の孫文、黄興、柏文蔚、李烈鈞、陳炯明たちが、袁世凱打倒に立ち上がるのですが、失敗して多くの人々が日本に亡命を致します。この第2革命の有名なスターとしては、柏文蔚という人が安徽省で蜂起します。李烈鈞という人は江西省で立ち上がります。陳炯明は広東で立ち上がるわけですが、ことごとく敗北します。そこで柏文蔚は長崎に亡命致します。孫文は東京に逃げます。李烈鈞は京都に留まります。この柏文蔚は、長崎に亡命を致しまして、1年9か月にわたって長崎に亡命者コミュニティを形成しました。1人だけで亡命するわけではなくて、逃げる時は奥さんを連れて逃げたり、子どもを連れて逃げたりします。ふるさとで奥さんが捕まって殺されるというケースがいくらでもあるわけで、家族ごと亡命したのです。ちょっと時期が違いますけども、有名な毛沢東の奥さんは捕まって国民党によって殺されております。そういうかたちで当時の記録によりますと、妻子も含めて43人の亡命者が長崎で暮らしていたといわれ

ております。当時の長崎に中川カルルスという旅館がありましたが、そこに龍吟橋という碑が残っております。これには柏文蔚の名前も書かれております。昔の人は軍人さんでありながら、上手な書ができないと、エリートにはならないわけで、彼も上手でした。最近になって中国琵琶の裏側に掘られた柏文蔚の詩というものが出ております。

それからもう1人、京都の方に亡命をしていました李烈鈞も長崎を訪れています。柏文蔚と一緒に第2革命を起こしました、柏文蔚は安徽省で、李烈鈞は江西省で蜂起しました。この男は非常に短気で、あんな袁世凱は許せないといって、みんなに先だって立ち上がったわけでありませぬけども、失敗して日本に逃げていました。しかしどうしてももう一回、袁世凱打倒の軍隊を立ち上げたいと、長崎にいた仲間の柏文蔚と協議するために、長崎に来ております。お二人の仲が良かったというだけではなく、実は李烈鈞の奥さんは長崎に留まり、柏文蔚をトップとする長崎のコミュニティの方に住んでおりました。旦那は京都の方にいるわけでありませぬ。その奥さんに会いたくて来たのかどうかは、よく分かりませぬが、長崎に来まして、郊外の道ノ尾温泉で柏文蔚と協議しております。外務省の記録によれば、11月26日から12月4日まで、道ノ尾温泉に滞在しています。私は6年間、長崎におりましたが、この道ノ尾温泉の近くに家がありましたもので、1週間に1回ぐらいは、いつもこの温泉に通ってました。実は今日、道ノ尾温泉のご主人さんも参加されています。

それからもう一人、有名なのは蒋介石です。蒋介石は皆さん知ってらっしゃると思いますけれども、彼も第2革命を失敗して、上海から日本へ亡命しています。当時、260名の革命派が長崎で上陸しております。柏文蔚のグループを除くと、ほとんどの亡命者は長崎から日本の各地に散っています。その時、長崎で蒋介石が新聞のインタビューを受けております。そこで、蒋介石は陳其美の幕僚陸軍少将であると自称しています。実は当時の彼は、こんなに高いポストではなかったのですが、詐称したのでしょうか。

その後1927年にも、蒋介石は長崎に上陸してから雲仙に2泊3日しております。この時の蒋介石は超有名人でありますから、日本の各新聞がこの行動を記録しております。

少し歴史的な話に入りますが、清国時代の話です。1886年、明治19年のことで、日清戦争の前であります。この時、東洋一の艦隊といわれた清国の北洋艦隊が長崎港に入ってきました。名目は修理をするということではありますが、目的はデモンストレーションでした。当時、清国の実力者であった李鴻章が北洋軍閥の元締めで、彼が北洋艦隊を組織し、定遠とか鎮遠など四隻が長崎港に入ったわけでありませぬ。定遠などは七千トンの巨大な軍艦でした。七千トンの軍艦といっても現在ではたいしたことないですけども、当時の日本海軍が保持していた軍艦は最大で四千トンにすぎませんでした。日本の最大軍艦の倍ぐらいの大きさの巨船が二隻、それ以外に少し小さい艦船も現れて、威風堂々とデモンストレーションしたわけですね。「どうだ、中国に歯向かったら日本なんてひとたまりもねえよ」と言うようなことを示すために行ったわけでありませぬ。この映し出した写真は、当時の長崎港に停泊中の定遠の写真であります。

実はこの艦隊の水兵400名が休息のために長崎に上陸をして、町に繰り出しました。皆行く所は決まっております、当然ながら丸山遊郭に向かいました。女性を買いに行ったわけでありませぬ。そうしたら大混乱です。突然400名が来たって、丸山遊郭も対応できません。先に予約していた上官たちは先に入れるのですが、後の人たちは入れない。ふざけんじゃねえって大喧嘩になります。言葉もなかなか通じないというかたちで喧嘩になりました。事態は一時収まるんですけど、後日、また大喧嘩になりました。実は喧嘩どころではありませんでして、殺し合いになりました。

警察官が中に入りましたが、その警察官が殺されることで大乱闘となって、ついには双方死者10名、負傷者71名に上りました。大変な惨劇で、今日、このような惨事が起こったらどないなるんだらうと思うような戦闘シーンが繰りひろげ

られました。清国兵士が8名死んで、日本の警察が2名死にました。清国の兵士は、武器を持って上陸はしてはいけないという決まりでしたから、上級士官しかサーベルを持っていませんでした。後はみんな丸腰だったのですが、長崎の骨董屋に行って日本刀を購入したと報道されています。当時、明治維新後に刀が不要になり、骨董屋に刀がいっぱいあったから、それを買って振り回したということでもあります。記録では、数十センチの短刀だったこともあります。あるいは喧嘩になった時には、その辺の酒屋、飲み屋にある箸を棒のように振り回して喧嘩をしたという記録もあります。日本側も、警察が対応しただけじゃなくて、市民がおっとり刀で、参加しています。まだ剣術道場などを開いている元武士崩れがいっぱいいましたから、そういう連中が刀を持って、久しぶりに暴れまわっています。

どっちが悪いかといえば、分は日本にない。死傷者数から見れば清国の方は8名も殺されているのに対し、日本側は2名しか殺されてない。いろいろな負傷者の状況について、細かい報告データがあるのですが、僕は別に中国側に肩を持つわけではないけれど、400名の兵士のほとんどは武装しておりませんですから、長崎の人たちが寄ってたかって水兵を襲ったというのが実態でありましょう。警察官が最初殺されますけれども、警察官は警察署がありました付近で殺されています。思案橋付近で、白昼大喧嘩があったということでもあります。これはもちろん国家関係を揺るがす大事件であり、政治問題になって国が乗り出して、やっとな解決をするわけでもあります。その後も東洋艦隊は日本に来ますが、こういうトラブルはその後は起こっていません。長崎は唐船貿易が行われてきたという歴史的経緯から、中国人に対する感情が非常に良かったのですが、この頃から悪くなってきたということが言えると思います。

日清戦争が起こりますと、華僑の方々は非常に苦しい状況になりました。1893年には610人いた華僑が283人になっておりまして、圧倒的に多くの華僑は清国に帰っていかざるをえなくなりました。しかし、その時に大森県知事が出した通達

があります。「本邦に在留する清国人民の中でこの際、疑懼の念を抱く者、これ有哉に相聞いているけども、例え日本と清国の間にいかなる関係が、戦争になろうとも在留人民に対して十分の保護を与うるは当然の義である、大切に扱わなくてはならない。決して反目、敵視、粗暴なる挙動、これをしないように心得るべきだ」というような通達を出しております。今、ご承知のように東京の大久保では、連日、週に一回「韓国人は出ていけ、殺せ、死ぬ」とか、ヘイトスピーチが繰り返りひろげられています。当時も「中国人は出ていけ」という危険がありましたが、大森県知事は、その民族的憎悪感の形成を戒めています。日清戦争で、国と国との戦争は、それはそれでやるとしても、庶民レベルでは仲良くしなくてはなりませんよという通達が出されております。

上海に形成された日本人街の話に移ります。上海にあった日本人租界、日本人街といわれるところに、圧倒的に多くの長崎人が住んでいました。上海の虹口、虹の口と書いてこれを、「ほんきゅう」と呼びました。この虹口に形成された日本人街の多くが長崎人でありました。例えば1906年の記録によりますと、長崎県の人とは1314人、2番目に多いのが大阪で393人、神奈川…と続きます。圧倒的に長崎の人が多いということが分かります。日本人街の中心では、ほとんどの看板は、日本語で書かれておりました。この写真は、日本人の住宅街で遊ぶ子ども達であります。上海におられた方の家に行ってアルバムを見せてもらいまして、その中の一つがこういう写真でありました。中国人の顔と日本人の顔とは違うかというところですが、人力車に乗せてもらって喜んでいる日本人の子ども達の写真であります。この日本人街・虹口というのは長崎の街であった、ともいえます。

当時、上海と長崎を結ぶ航路が開かれており、日華連絡船といいますが、26時間で、上海と長崎にお互いに行けました。長崎から列車で東京に行くよりも速かったと言われております。いろんな記録があるのですが、1933年の『大阪毎日新聞』では、とにかく虹口には九州人が1番多い。九州人の中でも長崎人が圧倒的に多

い。「道を歩いていると、通行者15人の内2分の1が日本人だ。その内の3人が九州人で、その内2人が長崎の人だと。ちょっと鼻にかかった長崎県なまりで、若い奥さんが親切に道案内してくれますよ」というような雰囲気であったと報道されています。こういう感じで虹口が事実上、長崎弁の世界であったといわれています。あるいは例えば「上海で生活している日本人の奥さん方も実はみんな長崎なまりになった」と。いろいろなお店へ行ったり、あるいはレストランに行くと、ほとんど働く女性は長崎人の女性で、いろんなことをやってくれるわけですから、そうすると長崎弁が分からないと上海で日本人は生活できなかったというような状況だったというのです。

しかし1932年の第1次と37年の第2次という、二度の上海事変が起こりまして、いわゆる租界地でありました上海の長崎の街、日本の街が戦場になります。あるいは、飛行機で空爆を致しましたから、爆弾も日本人街周辺に落ちますし、日本軍に反撃をする銃弾も落ちます。それから日本が攻撃をしますと、攻撃するのは日本人街以外のところですから、被害を受けた中国人はみんな避難します。日本人街は攻撃されないというのが分かりますから、中国人が日本人街に流れ込んで来るという大混乱が起こっています。日本人街の日本人も、いつ我々もやられるか分からんということで、この第1次上海事変の時は、上海居留民団という日本人が作っている居留民の組織が、日本人防衛の日本兵士を送ってくれと、上海同朋3万人のために日本に向かって救援を求めています。もし、実現しなければ、我々はもう上海を引き上げるか、座して死を待つのみしかないというような壮絶な話があります。

第2次上海事変では、当時2万6千人いた上海の居留民はその多くが引き上げる。その場合、長崎に引き上げます。定期船である長崎丸、上海丸以外にも、迎いの船が派遣されています。避難学童は長崎の小学校、中学で引き受けております。結果的に11隻の船で1万4千人を上海から長崎に輸送したという記録があります。

その後、本格的に日中戦争が始まりまして、日本側は国民党の中国との戦争でありますから、

日本にいる国民党员への弾圧が始まります。在日華僑の中にも国民党员がいっぱいいた。そうすると奴らはみんな国民党、あるいは国民政府のスパイじゃないかということになって、日本の特高警察によって睨まれる。そして全国一斉検挙されることとなり、これは全国的に国民党事件といわれます。その時に295人の内、長崎が1番多くて79人が検挙されています。長崎にそんなに多くの国民党関係者がいたとは考えられない。華僑の数からいうと、大体長崎華僑の数は1000人前後ですから、横浜、神戸に比べて数は圧倒的に少ない。長崎の中華街は小さい方にもかかわらず、逮捕者が1番多かった原因は、当時の長崎で、軍艦武蔵が建造中という特殊事情があったのではないだろうかとも言われております。

ちょっと政治の話から離れますけども、貿易関係で、長崎華僑の活躍というものは目を見張るものがありました。今、我々は新地の中華街に行きますと、どちらかというと中華料理を食べるためのレストラン街になっています。横浜中華街の規模はけた違いに大きいですけど。横浜もどちらかというとレストラン中心の中華街です。しかし、もともとはあの中華街がレストラン街に変わるのとは戦後の話でありまして、戦前はほとんど商社の街、商売、貿易業に専念している人たちの街でありました。明治になりまして華僑が、中華街を形成します。それまでは長い間、中国人は唐人といわれ、長崎の唐人屋敷に籠められていました。開国で唐人屋敷が解体され、唐人屋敷以外に自由に住むことが出来るようになって、だんだんと新地に集まり始めました。そこは昔の倉庫街であり、多くの倉庫がありましたから、それを利用して貿易をするようになりました。その取扱高が明治2年には、実は欧米商社をしのぐほどの大きさになります。日露戦争後になって日本商社に追い越されるまでは、実は長崎の貿易を担っていた主流は華僑であったということが言えます。この華僑貿易の中心となったのは泰昌号です。その後、泰益号という。号というのは中国の商社の名前がだいたい号、なになに号といわれるものです。泰益号は今、日航のホテルになっている所にあります。実は膨大な商売

上の記録がありまして、これが泰益号文書として残っています。この文献を使って、既に博士号とられた方が多くおられるほど貴重な文書が存在しております。世界いろんな所で華僑は活躍しておりますが、商取引の記録がちゃんとして残っているのは、これが一番最大だといわれております。

中国の永豊艦という砲艦の話みなさん知ってらっしゃるかどうかわかりませんが、これも長崎と深い関係があります。永豊艦は1913年に三菱の長崎造船所で建造されました。後に中山艦と名称が変わりました。これもおもしろい話があります。最初は清国海軍が長崎造船所に砲艦建造を注文しましたが、造り始めている途中で辛亥革命がおこって政府が変わってしまった。三菱造船所は大慌てです。新政府はほんとに買ってくれるのだろうか。買主がいなくなっちゃったわけですね。困った、困ったということで、当然ながら中華民国の新たな海軍に、ほんとに買ってくれるのかと交渉したところ、買いますということになって無事に解決しました。注文先と引き渡し先は異なるといういわくつきの砲艦でした。

実はこれはわずか836トンと、非常に小さい小型の砲艦ですが、中国人にとって有名な砲艦があります。実はのちに陳炯明という、かつて孫文の部下だった人が広州で孫文に反乱をしたときに、孫文はこの船に逃げ込みました。この永豊艦はもともと海洋で行動する艦艇ではなくて、河川用に造られたものです。河川といっても、日本の川と違って中国の川はでかく、海みたいな川ですが、そこで活動する艦艇でありまして、反乱当時は広東・広州の珠江に停まっていたのですが、この船に逃げ込んで抵抗します。孫文が死んだ後に、孫文(孫中山)の名前をとって中山艦と名称を変えました。孫文は共産党と手を組んでいましたが、後を継いだ蒋介石は共産党との関係が悪化し、その共産党への弾圧を開始する始まりが「中山艦事件」であり、有名な政治的舞台になったことで、艦名も非常に有名になります。あまり軍事的には活躍はしていない小型砲艦ですが、政治的に名前をとどろかせています。その最期は悲惨です。日中戦争起こりますと、武漢の近く

で日本軍の空爆で沈没させられました。ところが、60年後の1997年に引き上げられました。途中、修理中に私も見に行行ったことあるのですが、今では武漢の郊外に中山艦博物館というのが出来て、展示されております。そこにも訪れましたが今では水に浮かばずドームのような建物におさまり、陸の上に揚がって展示されております。

それから、文化的なお話を致しますと、明治期に入ってその活動の中心となったのが清国領事館です。長崎はもともと九州の中では一番大きな街であり、それから外国に開かれていたという過去の歴史もありまして、各国の領事館が次々と造られます。一番古いのがイギリス領事館であります。その次に出来たのは清国領事館であります。1878年に理事府として開設されました。その後に領事館と名前を変えますが、最初は領事館のことを理事府と言っていたらしいです。今でも長崎に中国の領事館がありますけども、本当は中国側としても長崎に領事館を置きたくないようです。長崎は無くて、もうちょっと大きな都市に置きたいということがあるようです。長崎をなくせば、他の重要都市に別の領事館を配置できるのですが、やはり長崎との関係は非常に歴史的なものがあるので、そう簡単に無くせないぞというようなことを総領事が言われておりました。何年か前、私が長崎にいた時に、総領事館のメンバーをお誘いし、我が家へ食事に行きませんかと言ったら、領事館全員が我が家に来られました。総領事以下全員の6人が来てびっくりしました。留守の総領事館の仕事はどうなっているのと聞いたたら、日本の何人かに管理させておりますというような話で、そんなに大きな領事館じゃありません。

長崎のシンボルの一つである孔子廟は、日清戦争が勃発する前に完成しています。これは華僑だけの力によって建立された孔子廟としては、日本で唯一とつだそうであります。それから、だんだんと長崎に華僑人口が増え、1000人を超しますと、当然ながら子ども達に対する民族教育をやりたいということになりました。簡単に言えば、子ども達も中国語が喋れるよう中国語で教える学校が欲しいということになります。こうして



領事館の指導で1905年に孔子廟に時中両等小学堂が作れます。当時は共通した中国語というもの、あるようではなかったわけでありまして、広東語、福建語、そして三江という大体上海周辺の言葉に分かれ、3つの地域別にクラスが分けられました。親父や、その家庭がしゃべっている言葉は異なっており、広東から来たグループ、福建から来たグループ、色々あるわけで、それぞれの方言で授業を行い始めました。ようやく1917年に国語、普通話、日本語では標準語といいますが、その共通語で教えるということになりました。北京語という言い方、マンダリンという言い方も致しますけれども、そういう言葉に統一されたようです。ですから、当時の生徒は、自宅で両親と話すのは、その親の言葉、広東語とか福建語、あるいは上海語ですから、先ずそれを覚えます。それから街に出ると日本人の子ども達と一緒に遊ぶわけですから、街では長崎弁をマスターします。そして学校に行くと北京語、標準語を駆使するという3つが使い分けられます。この学校は、どこに造られたかといえば、孔子廟の境内に学校がありました。この写真は1917年頃の孔子廟の前に集まった生徒達の写真であります。孔子廟はいわば宗教的な建物だけではなく、そうした教育の場であったということでもあります。

よくよく考えると中国の各地に孔子廟がいっぱいありますけれども、中国の各地の孔子廟も日本でいうお宮さんというよりは、そこは儒教、儒学を勉強するところでもありますから、儒教は宗教であると同時に、学びの場でもあったと言えます。長崎でも同じような役割をしたのはないだろうかと思います。

これにて終了でございます。ご清聴ありがとうございました。